The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカ大統領の就任演説におけるメタファー : ケネディ・ニクソン・オバマの就任演説を比較して
Author(s)	友繁, 有輝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 53-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61990
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アメリカ大統領の就任演説におけるメタファー
―ケネディ・ニクソン・オバマの就任演説を比較して―

博士後期課程１年　友繁有輝

1. はじめに

昨今の世界情勢は、グローバル社会の真っただ中にもあるにも拘らず、特にアメリカではその流れに逆行する現象が認められ、世界は罵詈雑言を発する大統領に対して批判的である。このような状況下で、国のリーダーが国民に語りかける演説は、世情を動かすほどの強い影響力がある。大統領のレトリックによって、どのような効果がもたらされるのか、という問題は様々な分野から分析できるが、本稿ではケネディ、ニクソン及びにオバマの各大統領が用いる言語表現を精緻に分析する手法を用いる。具体的には、アメリカ大統領の就任演説で使用されているメタファー表現を抽出し、それらの表現によって何が聴衆に伝えられるのか、という点を探っていきたい。本稿では、民主党からはケネディ、オバマ、そして共和党からは、ニクソンの就任演説の分析を行う。メタファーは単に言語的な飾りつけではなく、概念に根差している（Lakoff & Johnson 1980; Lakoff 1987; Lakoff 1989; Lakoff 2002)[1]。それゆえ本稿では各大統領のメタファー表現よって創出される意味について考察する。

本稿の構成は以下の通りである。まず２節でケネディ、３節と 4 節でそれぞれオバマ、ニクソンのメタファーの分析結果を提示する。そして 5 節において今回取り上げた大統領の就任演説に見られるメタファーの比較を記載してまとめとしたい。

２．ケネディの就任演説に見られるメタファー

ケネディの演説[2]で使用されているメタファー表現に関して、以下の表で示されているように様々なメタファーの起点領域が確認された。目標領域については、カテゴリーの分類ごとにそれぞれ何を指し示すのかを確認していく。

表 1. ケネディの就任演説でのメタファーの起点領域

＜メタファーの起点領域＞
＜旅＞＜競争・競技＞＜感覚＞（触覚・聴覚・味覚・視覚）＜戦争＞＜動物＞＜人＞

[表 1]のメタファーの起点領域を観察すると、それぞれ親カテゴリーがあるのではないかと予測がつく。すなわち、＜旅＞＜競争・競技＞は演説の中では経路から想定されるメタファーであるので、「経路カテゴリー」、そして「感覚カテゴリー」、「戦争カテゴリー」、モノが比喩的に何かを意味している「非生物（モノ）カテゴリー」、そして＜動物＞＜人＞メタファーからは、「生物カテゴリー」と分類できる。本稿では、各大統領の演説内で生じるカテゴリー内のメタファー表現に焦点を当てて分析を行う。

---

[1] Lakoff の一連の研究では、メタファーは、思考・知識・イデオロギーを構成することを概念メタファーによって説明している。例として LOVE IS A JOURNEY という概念メタファーでは、LOVE が目標領域であり、JOURNEY が起点領域として考えられている。概念メタファー理論では、起点領域の具体的でとりわけ身体に根差した経験によってその内包される意味が目標領域に写像されると捉えられている。本稿においてもこの考え方を採用し、メタファー分析の際に起点領域と目標領域に分けて分析を行う。

[2] ケネディのスピーチライターSorensen (1965)は、ケネディの就任演説を書く際に気を付けたことを以下のようにまとめている。(a) short speeches, short clauses and short words, wherever possible; (b) a series of points or propositions in numbered or logical sequence, whenever appropriate; and (c) the construction of sentences, phrases and paragraphs in such a manner as to simplicity, clarify and emphasize. (Sorensen 1965 : 61) (a)~(c) からわかることは、簡潔に、短い語や節を用いて演説のポイントを論理的に説明し、シンプルにかつ強調することが演説を書く上で重点的に意識されていたことである。

2.1「経路カテゴリー」のメタファー

ケネディ就任演説の中では、“course”を使用することで、経路のカテゴリーを想起させ、その中で＜旅＞＜競技・競争＞のメタファーが介在していると考えることができる。以下の(1)が例として挙げられる。

(1) a. But neither can two great and powerful groups of nations take comfort from our present **course**.
b. In your hands, my fellow citizens, more than mine, will rest the final success or failure of our **course**.

(1a)では現在の経路を、(1b)では、未来へ続く経路を表している。疑問点としては、“course”という単語のみでメタファーを想定できるのかという点であるが、大統領の演説を取り扱った Corpus of Political Speeches からの用例を提示し、確認してみたい。

表２. Corpus of Political Speeches での検索結果

＜頻度＞Course 35 件/69 件	of course 34 件/69 件　(course 単数形を検索)
＜出典＞（1789~2015）	
Inaugural Addresses (USA), National Political Party Platforms (USA) Presidential Candidates Debates (USA) Presidential Nomination Acceptance Speeches (USA) Saturday Radio Addresses (USA) Annual Messages to Congress on the States of the Union (USA)	

[表 2]からわかることは、1789 年~2015 年の間にアメリカ大統領が行った様々な演説の文脈を分析すると、“course”が比喩的に経路を意味していたものは、69 件中 35 件とちょうど半数程度に及ぶということである。つまり、大統領の演説において、“course”を比喩的に使用し、過去・現在・未来を結び付けるひとつの手段として用いることは珍しいことではないことが見て取れるだろう。ではこの経路というカテゴリーはどのようにして、＜旅＞と＜競技・競争＞のメタファーと結びつくのだろうか。演説を分析してみると、＜旅＞と＜競技・競争＞に関連する語”beginning”, “end”, “progress”, “outpaced”, ”run”, “racing”, “ranks” が見受けられ、それらがメタファー解釈を促す要因になっていると考えられる。まず、＜旅＞＜競技・競争＞のはじまりの意識は、以下の表が示すような構造となっており、＜旅＞や＜競技＞を連想させている。

表３．＜旅＞・＜競技＞を連想させる表現

＜表現＞	(例)symbolizing an **end**, as well as a **beginning**－signifying renewal, as well as change That both sides **begin** anew the quest for peace But let us begin
＜メタファー表現＞	(例) the **torch** has been passed to a new generation of Americans.

[表 3]の字義表現では、ケネディが就任演説を行った 1963 年以前の時代は終わったこと、そしてそれに代わって新たな時代、変化の幕開けを示唆しており、それらがメタファー表現（松明は新たなアメリカ世代へと渡された）と融合し、聴衆に対して一緒に旅する旅人もしくは、オリンピックの聖火ランナーであるかのようなイメージを抱かせている。以上のことを踏まえると、過去から未来へとつながる経路があり、＜旅＞や＜競技＞の目的地に着くことが最終目標となる。したがって、目標領域は、「目標達成までの過程」となるだろう。そしてその目標達成までの過程で生じるであろうことが、他のメタファーによっても提示されている。2.2 節では、「感覚カテゴリー」のメタファーを考察し、＜旅＞のメタファーとのつながりを観察していく。

2.2 「感覚カテゴリー」のメタファー

「感覚カテゴリー」のメタファーでは、主に触覚（圧覚）、聴覚、味覚、視覚に伴う表現が観察された。まず触覚に関するメタファーは、“hard”, “heavy burdens”, “overburden”, “burden”という語から、重荷を背負っているイメージがあり、前節で考察した＜旅＞のメタファーと結びつく。目標領域は、旅の最中で旅人は重荷を肌で感じとり、苦労している様子を表していると考えられる。演説の中で、ケネディは、“Now the trumpet summons us again” という風に聴衆に呼びかけているが、“trumpet”は厳密に言うと、トランペットの音を示し、聴覚を刺激するメトニミー表現であり、

“call”については、“call to service surround the globe”, “not as a call to bear arms”, “call to battle”, “call to bear the burden of a long twilight struggle”という形で計 4 回使用され、聴覚に焦点を当てている。視覚に関しては、“view”という単語の使用により、世界観、見解のこと示しており、視覚に伴う関連語としては、“inspection”, “witness”が用いられている。これは、＜理解することは見ることである＞（Lakoff & Johnson1980）というメタファーに裏付けられていると考えることができるだろう。視覚のメタファーで一番顕著なのは、＜光＞と＜闇＞のメタファーである。＜光＞に関しては、“The energy, the faith, the devotion which we bring to this endeavor will light our country”, “that fire truly light the world”という形で２回使用されている。前者は、アメリカ国民が協力して敵に立ち向かうことで、世界が良い方向に進むことを示していることから、＜光は善である＞（Deignan2015）というメタファーが基盤となっている。さらに、国民のエネルギー、信条、献身は、「火」として認識され、それぞれの火が世界を照らす源であることが読み取れる。＜闇＞に関しては、“the dark power of destruction”のコロケーションで使用されており、名詞“destruction”と結びつくなどから、ネガティブな事柄を表している。よって＜闇は悪である＞（Deignan 2015）というメタファーが下地になっていると考えられる。最後に、味覚に結びつくものとして、“a hard and bitter peace”が挙げられる。“hard”は先述した通り、触覚に基づく形容詞であるので、固さから困難さを意味し、また形容詞“bitter”は苦さから状況が苦しいことを示す比喩表現である。(これらの事実を踏まえると、平和は決して生ぬるい状態から生じたものではなく、困難さの中に存在していることを訴えかけているレトリック表現であることが認められる。

2.3 「戦争カテゴリー」のメタファー

「戦争カテゴリー」のメタファーにおいても＜旅＞のメタファーが関与していると考えられるが、詳細に入る前に、演説内での戦争に関連する語を確認しておこう。演説内で使用されている語は“fought”,“foe”(2),“survival”, “enemies”(2), “defend”, “sacrifice”, “shield”, “destroy”などが挙げられる。＜旅＞の過程では、困難が待ち受けていることを前節で見たが、一番の障害は、行く手を塞ぐ障害物である。演説では、その障害物が「敵」として捉えられており、ケネディは次のように「敵」の具体的な内容を記している。

(2) a struggle against the common enemies of man: **tyranny, poverty, disease and war itself.**

(2)からは、＜敵は専制政治、貧困、病気、戦争である＞という認識が介在していることがわかる。＜旅＞のメタファーと通ずるところは、スタート地点から目的地に到着するために、目的を達成する過程において専制政治、貧困、病気、戦争といった敵と戦わなければならないことを意味している点であろう。

2.4 「非生物（モノ）カテゴリー」のメタファー

非生物（モノ）のカテゴリーでは、モノが字義通りの意味ではなく比喩として使用されている。例えば、演説の中で、“chains of poverty”という言葉が用いられているが、“chain”の比喩義はどのような意味なのだろうか。*Oxford English Dictionary(OED)*では、“A binding or restraining force which prevents freedom of action”(行動や自由を妨げる束縛や制限的な力)と記載されている。また、“A connected course, train, or series; a sequence”(つながりのある過程、連続、系列、因果的連鎖)と明記されている。したがって、“chains of poverty”という表現を使うことで、断ち切ることのできない貧困を指している。その貧困を＜旅＞メタファーに当てはめると、それは行く手を防ぐ障害物であり、＜戦争＞メタファーにあてはめると、「敵」と見なされる。また、断ち切ることのできない事実はその他のモノの描写によっても具現化されている。“Chain”の字義通りの意味は、*OED* では、“As employed to restrain or fetter; hence a bond or fetter generally; esp. in *pl.* fetters, bonds; *abstr.* confinement, imprisonment, captivity”と書き記されており、“bond”(束縛するもの、結ぶもの),“fetter”(足かせ、束縛、拘束)の意味記述が中心的である。何かと何かが結びつくことで塊になる概念に関しては、実際に演説では、“bonds of mass misery”,“break the bonds”が使用されている。前者は惨めさの塊、後者はその塊を壊すことを表し、貧困や惨めな生活から脱するための解決策を見出すという解釈を導き出す。このように、“bond”や”chain”という語を選択することで、容易には解決できない、世界にはびこっている事柄を巧みに描写しているのである。その他には、モ

ノが感情を表す比喩が確認される。2.3 節において、人類共通の「敵」のひとつに専制政治が入っていることを確かめるが、演説では専制政治を形容する語として“iron”が用いられている。*OED* の形容詞の比喩義は、“harsh, cruel, merciless; stern, severe”であり、厳しさ、残酷さ、無慈悲なイメージを喚起することによって、専制政治における恐怖の感情を顕現させている。この節では、非生物カテゴリーに着目したが、次節では生物カテゴリーの中のメタファーを観察する。

2.5 「生物カテゴリー」のメタファー

生物カテゴリーでは、主に「人」と「動物」が演説内では使用されている。「人」に関しては＜国家は人である＞（Deignan2015）のメタファーが挙げられる。ケネディは国に対して、“friend”,“friends”(2)を用いることで、隣国との親近感を表明している。「動物」に関しては、過去の専制政治による誤りを(3)のように表している。

(3) Those who foolishly sought power by riding the back of the **tiger** ended up inside.

(3)では、虎[3]にまたがり権力を行使する者は、結局その虎の餌食になることを意味しているので、メトニミー由来のメタファー表現（Goossens 1995）である。虎の比喩義は *OED* では、獰猛、冷徹、残酷、残忍な人のことを指し示すので、前節の専制政治を形容する“iron”と意味の対応が見受けられる。「動物」に関連する語としては、“prey”,“unleash”が用いられており、(4)のように、いずれもネガティブなニュアンスを響かせている。

(4) a. the **prey** of hostile powers
b. the dark powers of destruction **unleashed** by science

(4a), (4b)で共通するのは、どちらも悪の力“hostile power”, “dark power”との関係性を述べている点である。(4b)では、“unleash”という単語が、動物の紐を解く様子を思い起させる。*OED* での定義は、“To free from a leash; to set free in order to pursue or attack”（紐から解放される、追い求める、攻撃するために自由の身にする）であり、動物的な攻撃性を表していると言えるだろう。この節ではケネディの就任演説に見られるメタファーを概観したが、以下でオバマの就任演説におけるメタファーについて取り扱う。

3. オバマの就任演説でのメタファー

この節では、オバマの就任演説の中に見られるメタファー表現について考察していくが、ケネディの就任演説の分析と同様に、親カテゴリーからそれぞれのメタファー表現を抽出し検討する。表(7)は、オバマの就任演説で使用されていた起点領域である。

表 4. オバマの就任演説での起点領域

＜メタファーの起点領域＞
＜旅＞＜水＞＜嵐＞＜植物＞＜季節＞（冬）＜人＞＜視覚＞＜味覚＞＜戦争＞＜網＞＜衣服＞＜建物＞

想定できる親カテゴリーは、「経路カテゴリー」、「自然カテゴリー」、「生物カテゴリー」、「非生物（モノ）カテゴリー」、「感覚カテゴリー」、「戦争カテゴリー」が挙げられる。次節からはそれぞれのカテゴリーとメタファー表現についての分析結果を提示する。

3.1 「経路カテゴリー」のメタファー

オバマの就任演説では、主に「経路カテゴリー」の＜旅＞のメタファーが軸となり、演説が組み立てられている。＜旅＞のメタファーが顕著であるのは、(5)に見られるように、“journey”が 3 回頻出していることからも伺える。「経路カテゴリー」に属する表現は、以下の表にまとめられる。

[3] Tiger (n.) A person of fierce, cruel, rapacious, or blood-thirsty disposition; also sometimes, a person of very great activity, strength, or courage. Also *spec.*, a native of the Fens (in full, fen tiger). *colloq. (OED)*

表 5. 「経路カテゴリー」（＜旅＞メタファー）との関連語

sacrifices borne by our ancestors, carry on, A short span of time, the next generation must lower its sight, to carry forward, passed on pursue, earn(2)<earn(1),hard-earned(1) **journey(3)**, seek(5), settle, short-cuts, path(2)<the path, the long, rugged path>, carried us, move forward, spin out of control, route, road, how far we have traveled, turn back, falter

[表 5]から多岐に渡る＜旅＞のメタファーに関する関連語が見受けられるが、＜旅＞のメタファーが使用されている(5)のコンテクストから内容を確認していきたい。

(5) a. Our **journey** has never been one of short-cuts or settling for less.
b. This is the **journey** we continue today.
c. Let it be said by our children's children that when we were tested we refused to let this **journey** end, that we did not turn back nor did we falter.

(5a)は、「私たちの旅に近道はなく、途中で妥協（旅をやめてしまうこと）はなかった。」という意味だが、英語では、旅に関連する表現として、“short-cuts”,“settling”が使用されている。(5b)では、「これが私たちが続けている旅だ。」という形で、過去から先祖が様々な苦難を乗り越えて続けてきた旅を明示している。(5c)では、「私たちの子供たちのまた子供たちに私たちは試練のときにこの旅が終わってしまうことを許されなかった、と語られるようにしよう。そしてたじろぎもしなかったし、引き戻すこともしなかったと語られるようにしよう。」という意味である。(5b)では、先祖から続く旅のことが示されているが、(5c)ではさらにその先にある祖先の旅についても言及されていることがわかり、他者性を意識している。オバマの演説では、＜旅＞のメタファーが中心となって過去から続く今後の目標地点までの道のりについて語られている。次節では「自然カテゴリー」について＜旅＞のメタファーとのつながりを考慮して検討する。

3.2 「自然カテゴリー」のメタファー

「自然カテゴリー」に関しては、＜水＞＜嵐＞＜植物＞＜季節（冬）＞が観察される。まず＜水＞についての表現として、“rising tides of prosperity”, “waters of peace”が用いられている。前者に関しては、繁栄の高まりを表しており、水が上昇すること[4]で繁栄の高まりを意味する表現である。後者の表現では平和な時を意味しているが、“water”にはどのような比喩の意味があるのだろうか。*OED* によると、“(chiefly biblical uses) applied to what satisfies spiritual needs or desires. <cf. water of life>” （主に聖書で使用。精神的充足、満足を得ることに対して用いられる。）とあり、平和と精神的な充足とのつながりを暗に示しているように思われる。精神的な充足は物質面の充足とも関連する。物質面、言い換えると経済的成長に関する内容は、演説ではインフラの設備や雇用の拡大、医療の質を高めることなど結果的に精神的充足に直結する内容が記載されている。また、＜水＞のメタファーに類似したメタファーとして、＜嵐＞のメタファーが演説では使用されており、具体表現として(6)が挙げられる。

(6) a. every so often the oath is taken during amidst **gathering clouds and raging storms**.
b. With hope and virtue, let us brave the once more the icy currents, and endure what **storms** may come.

(6a)は、大統領の宣誓は、雲が集まり、嵐が吹き荒れる中で行われたと書かれているが、字義通りの解釈では意味が成り立たない。“gathering clouds and raging storm”の目標領域は、「困難の最中にいること」であり歴代大統領も困難な状況の中、宣誓をしたという解釈が妥当だろう。また、“raging storms”(怒っている嵐=吹き荒れる嵐)は、“storms”が擬人化されていることから、＜嵐は怒っている人である＞というメタファーも追加することができる。(6b)は、希望と美徳をもって、氷のように冷たい流れに再び立ち向かい、どんな嵐が来ようとも耐えようと呼びかけており、ここでは

[4] Lakoff & Johnson (1980)では、身体経験を基盤とした空間に基づくイメージスキーマとして、GOOD IS UP, BAD IS DOWN というメタファーを提示している。したがって、“rising tides of prosperity”に関しては、GOOD IS UP が基礎となっていると考えることができる。

“storms”の他に、自然カテゴリーに分類できる“icy currents”が観察される。“icy”とは、オックスフォード新英英辞典では、“very unfriendly”,“hostile”と記されており、人類もしくはアメリカ国民にとって好ましくない出来事のことである。また、“currents”は、通常＜水＞との関連で、流れ、流動、海流のことを指し示すことから、目標領域は、「好ましくない時の流れ」であり、最初の＜水＞のメタファーからの継承表現であると考えることができるが、後述する＜季節（冬）＞のメタファーの一部であるとも考えられよう。＜植物＞を彷彿させる表現は、“sapping of confidence”である。この表現からは、＜人は植物である＞（Lakoff & Turner 1989）というメタファーが考えられる。続いて＜季節（冬）＞のメタファーでは、“in the winter of our hardship”, “icy currents”が＜季節（冬）＞のメタファーに分類できるだろう。四季の中で、＜冬＞は困難な時期を指し示す。*OED* の比喩義においても“in reference to old age, or to a time or state of affliction or distress”という意味が記載されており、演説の内容と照らし合わせると苦悩や苦境を示唆しており、困難な状況下にあることを冬の季節に喩えている。また、困難性、好ましくない状況という解釈は,先述したように“icy currents”の解釈とも相いれる。このように、「自然カテゴリー」のメタファーは、「目標達成までに生じる困難性」を描写する役割を果たしていると考えられよう。

3.3 「生物カテゴリー」のメタファー

前節では、「自然カテゴリー」のメタファーについて言及したが、生物も自然の副産物であるので、「自然カテゴリー」の下位分類として考えることもできるかもしれないが、ここでは便宜上別のカテゴリーを設定しておく。「生物カテゴリー」では、メタファー＜国家は人である＞（Deignan 2015）が検出され、次の(7)において具現化された表現を提示する。

(7) America’s decline, strangled our politics, friend(2)[5], foe[6], ushering, a young nation

(7)から読み取れることは、国を人の中でも友人、敵、案内人に見立てていることである。ではどの国がそれぞれの役割を果てしているのかを(8)を参考にみていこう。

(8) a. America is a **friend** of each nation and every man, woman, and child who seeks a future of peace and dignity.
b. With **old friends** and **former foe**, we will work tirelessly to lessen the nuclear threat, and roll back the specter of a warming planet.
c. America must play its role in **ushering** in a new era of peace.

(8a)は、アメリカが未来の平和と尊厳を探す者は老若男女を問わず友人であることを表明し、(8b)ではアメリカの同盟国を友人とみなして敵国と対比させているが、地球温暖化や核について協力して対処していこうと提案している。(8c)では、新たな平和の時代を案内して行くのがアメリカの役目であると記述されていることから、アメリカが世界の案内人であることを知らせるためのメタファーである。さらにオバマはアメリカを友人や案内人と見立てるだけでなく、“a young nation”であることを世界に発信し、メタファー＜アメリカは若者である＞を強調している。オバマはあくまでも＜若者＞であることを喝破しており、(9)のように＜子供＞に纏わる概念に対して否定的な考えを示している。

(9) a. the time has come to set aside **childish things**.
b. a **nagging fear** that America’s decline is inevitable.

(9a)は、オバマは国民に子供じみたことをやめる時がきたと諭している一方で、(9b)は、“nagging”という単語から「子供」がつきまとうようなイメージを抱かせている。この場合は、子供のようにつきまとっているのは恐怖という感情であり、いずれにせよ肯定的な意味合いは含まれていな

---

5 演説では、friend が２回、friends1 回と計３回使用されているが、２回目の friend は国を人に喩えたものではなく、字義通りであるため、(7)では２回と表示している。
6 ケネディの演説では「戦争カテゴリー」に分類しているが、(8b)のコロケーションで使用されているため「生物カテゴリー」の方がこの場合は適切であると判断した。

い。ここでの恐怖とはアメリカが衰退する、死に近づくという恐怖であり、“America's decline”[7]とい表現でも言い換えられている。このように、「生物カテゴリー」では国を人に見立てるメタファーが中心軸となっている。

3.4 「感覚カテゴリー」のメタファー

「感覚カテゴリー」の中では、視覚と味覚のメタファーが観察された。視覚に関係する語は、ケネディの演説同様＜光＞と＜闇＞のメタファーが主要なメタファーである。以下の(10a)は＜光＞のメタファー、(10b), (10c)は＜闇＞のメタファーの例である。

(10) a. Those ideals still **light** the world, and we will not give them up for expedience's sake.
b. We are shaped by every language and culture, drawn from every end of this Earth; and because we have tasted the **bitter** swill of civil war and segregation, and emerged from that **dark** chapter stronger and more united.
c. It is the kindness to take in a stranger when the levees break, the selflessness of workers who would rather cut their hours than see a friend lose their job which sees us through our **darkest** hours.

ケネディの演説では、国民のエネルギー、信条、献身は、「火」として認識され、それが世界を照らす源であることが明らかにされているが、(10a)からは、世界を照らす源は“ideals”であり、演説ではこの名詞が計３回使用されている。では、“ideals”とは一体何を指し示すのか。それぞれの“ideals”の正体を突き止めてみよう。第一回目から第三回目の“ideals”の生起を順に追ってコンテクストを概観してみたい。

(11) a. We the People have remained faithful to the **ideals of our forbearers**, and true to our founding documents.
b. As for our common defense, we reject as false the choice between our safety and **our ideals.**
c. Our Founding Fathers, faced with perils we can scarcely imagine, drafted a charter to assure the rule of law and the rights of man, a charter expanded by the blood of generations. **Those ideals** still light the world.

(11a)は、(6a)の続きの文章であり、困難な時をどのように先人が乗り越えてきたのかを述べたものであるが、コンテクストの内容は、「そのような時を米国が耐え抜いてきたのは、指導者の技量や洞察力だけによってではなく、我ら合衆国の人民が先人の理想に誠実で、（独立宣言など）建国の文書に忠実だったからだ。」とあり、“ideals”とは先人の理想を指す。(11b)は、「国防について、私たちは、安全と理想の二者択一を拒絶する。」とあり、(11a)から引き継がれた意味である。(11c)では、「米国の建国の父たちは、私たちが想像できないような危険に直面し、法の支配と人権を保障する憲章を起草した。これは、何世代も血を流す犠牲を払って発展してきた。この理想はいまも世界を照らしている。」と説明がされており、理想とは、建国当時から掲げられた法の支配と人権の保障を示唆している。よって、オバマの演説ではそれらが光の源であると認識されている。さて、＜光＞と対照的な＜闇＞のメタファーにはどのような認識が隠れているのだろうか。(10b)では、オバマはアメリカという国は、「世界のあらゆる所から集められたすべての言語と文化によって形作られた私たちだ。私たちは、南北戦争と人種隔離という苦い経験をし、その暗い歴史の一章から、より強く、より結束した形で抜け出した。」と説き明かしている。ここでは、“the dark chapter”という表現から＜歴史は本である＞というメタファーがあると想定でき、その歴史の中での負の出来事を視覚メタファーを喚起する形容詞“dark”を用いて、アメリカの歴史を描写している。その際の闇のメタファーは、＜闇は悪である＞であり、光のメタファー＜光は善である＞と対立関係にある。(10b)はさらに、視覚のメタファーに加えて、味覚のメタファーも観察される。“bitter swill and civil war and segregation”は、「南北戦争と人種隔離という苦い経験」を意味し、負の経験を味覚表現の「苦い」という形容詞を用いて表している。また、(10c)の全体のコンテクストは、「最も難

[7] 『リーダース英和辞典』では、＜人生・季節など＞終わりに近づく；＜力、健康、価値など＞衰える、衰退する、減退すると記載されている。“America's decline” は、＜国家は人である＞というメタファーによりアメリカの弱体化を示唆したものである。

しい局面を乗り切るのは、堤防が決壊した時に見知らぬ人を招き入れる親切心であり、友人が仕事を失うのを傍観するより自分の就業時間を削減する労働者の無私の心だ。」であり、“darkest hours”は、「最も難しい局面」のことではあるが、厳密には、最も暗い局面のことであり、視覚に基づくメタファーをベースとしていると考えることができるだろう。以上のように、「感覚カテゴリー」では、視覚、味覚のメタファーが検出される。

3.5 「非生物（モノ）カテゴリー」のメタファー

「非生物（モノ）カテゴリー」のメタファーでは、＜網＞＜衣服＞が起点領域となるメタファーが確認され、＜建物＞のメタファーが一貫性をもって用いられている。＜網＞に関しては、“a far-reaching network of violence”、＜衣服＞に関しては、“dust ourselves off”, “patchwork”がそれぞれ用いられている。＜網＞のメタファーでは、暴力に対する捉え方は、広範囲に広がるネットワークとして認識されており、目標領域は、「領域」のことを指し示している。また、＜衣服＞のメタファーが使用されているコンテクストとしては、アメリカ国民が今後取り組まなくてはならない課題が列挙されており、具体的内容としては、同じところに立ち止まっているわけにはいかず、自らを奮い立たせ、ほこりを払い落して、アメリカ再生をもう一度始めなければならないことが述べられている。ここでの、“dust ourselves off”は、実際に服の埃を払い落し、アメリカ再生に取り組む場合も含むかもしれないが、その動作によって意欲やその動作の先にある出来事を見据えて用いられている表現なので、これは、メトニミー由来のメタファーである。（Goossens 1995）また、“patchwork”は、いろいろな形・色の布や皮のはぎ合わせ細工や寄せ集めという意味であり、“for we know that our patchwork of heritage”というコンテクストからもわかるように、アメリカの様々な文化、人種を、服をはぎ合わせて作られたような多様性を有するものとして捉えているのである。また、「非生物（モノ）カテゴリー」の中では＜建物＞メタファーが特に効力をもつ。(12)がそのメタファーが使用されているコンテクストである。

(12) a. we must pick ourselves up, dust ourselves off, and begin again the work of **remaking** America.
b. not only create jobs, but also lay a new **foundation** for the growth.
c. Now, there are some who question the **scale** of our ambitions.
d. We will **restore** science to its rightful place.
e. know that your people will judge you on what you can **build**, not what you **destroy**.

(12a)は、＜衣服＞のメタファーの箇所でも取り上げたが、＜建物＞のメタファーにおいても、「アメリカを再生する仕事」という形で生じている。このメタファーは、アメリカを建造物に見立て＜国は建物である＞というメタファーを基軸としており、(12a)のように、<建物>のメタファーを使用することで、(12b)~(12e)に見られるように国を建造物に見立てるだけでなく、他のモノに対しても転用されるよう動機づけている。(12b)では、成長を建物と見立てることで、成長の基礎を築くことを意味し、(12c)については、野望という抽象度の強い名詞に“scale”という建築用語を共起させることで、その野望の大きさを明確に示している。(12d)では、“restore”という動詞から、何かを再び立て直すようなイメージを抱かせている。(12e)は、全体のコンテクストが、イスラム教信者に向けてのメッセージであり、オバマは何かを作り上げることと、破壊することを対比させ、＜建物＞のメタファーを用いることで前者を強調している。以上のように、「非生物カテゴリー（モノ）」カテゴリーでは、＜網＞＜衣服＞そして＜建物＞のメタファーが確認される。

3.6 「戦争カテゴリー」のメタファー

「戦争カテゴリー」のメタファーでは、＜国家・世界の混沌状態は戦争状態である＞が認められる。具体的な表現は、(13)に示す。

(13) That we are in the midst of crisis is now well understood. **Our nation is at war**, against a far-reaching network of violence and hatred.

(13)では、オバマはアメリカがどのような状態にあるのかを描写しているが、“midst of crisis”（危機の最中）にあることが初めに述べられ、さらにその状態を戦争の最中にいる様子と結びつけて

いる。そして何に対する戦いかというと、前節の＜網＞のメタファーで取り上げた広範囲に広がる暴力と憎しみである。さらにオバマは(14)のようにその結果どのような苦しみがあるのかということを詳述している。

(14) Homes have been lost; jobs shed; businesses shuttered; Our health care is too costly; our schools fail too many; and each day brings further evidence that the ways use energy strengthen our adversaries and threaten our planet.

(14)の内容として、家が失われ、雇用は減らされ、企業はつぶれ、高額な医療費、学校はあまりにも多くの人の期待を裏切っていること、そして石油などを大量消費する人類のエネルギーの使用方法が敵を強大にし地球を脅かしていることが、日に日に明らかになっていることが述べられている。＜戦争＞メタファーを用いることで、国、世界の混沌とした様子を端的にまとめている。次節では、共和党のニクソンの就任演説の分析を概観してみたい。

4. ニクソンの就任演説に見られるメタファー

前節では、民主党のオバマとケネディの就任演説のメタファーを分析し、起点領域と目標領域の対応関係について検討した。この節では、共和党のニクソンの就任演説のメタファーについて論じる。ニクソンの就任演説においても多様なメタファーが観察されたが、親カテゴリーからそれぞれのメタファーを拾い上げて考察する。[表 6]は、演説の中で観察された起点領域である。

表 6. ニクソンの就任演説での起点領域

＜メタファーの起点領域＞
＜冒険＞＜視覚（光）（闇）＞＜人＞（身体部位 heart と spirit の対比）

上記のメタファーが確認されたが、親カテゴリーとしては、「経路カテゴリー」、「感覚カテゴリー」、「生物カテゴリー」が見て取れた。次節ではそれぞれの親カテゴリーに基づきメタファー分析を提示する。

4.1 「経路カテゴリー」のメタファー

経路カテゴリーにおいては、ニクソンは＜冒険＞メタファーを用いており、演説では、“adventure”という語を以下のように使用して＜冒険＞メタファーを顕現させている。

(15) I ask you to join in a high **adventure**—one as rich as humanity itself, and exciting as the times we live in.

(15)は、国民に対して雄大な冒険に参加するよう呼びかけ、その冒険とは人間性そのものと同じくらい豊かで、そして私たちが住む時代と同じくらい心が揺さぶられるものであると示している。また、＜冒険＞と関連する語（経路カテゴリー）に分類できる表現は以下の通りである。

表 7. 経路カテゴリー（＜冒険＞メタファー）との関連語

courses, progress, go forward(5), reach(7), chart, advances, horizons (2), strides, goal(4), seek(4), pursue, riders

[表 7]のいずれの語も＜旅＞や＜航海＞などのイメージを喚起するものであるが、(15)でも取り上げたように、ニクソンは“adventure”[8]という語を用いており、＜旅＞や＜航海＞は＜冒険＞メタファーの中に含めていると考えられる。しかし、＜旅＞と異なり<冒険＞は、*OED* の定義と照らし合わせてみても、リスクや大胆さを含んでいる。＜冒険＞メタファーの目標領域としては、ケネディやオバマの演説と同様、「目標地点までの過程」ではあるが、相違点としては、目的地がはっきりとしないリスク・大胆さを含んだ解釈を導くことだろう。次節では、ニクソンの演説の核と

[8] A course of action which invites risk; a perilous or audacious undertaking the outcome of which is unknown; a daring feat or exploit. (*OED*)

なる身体部位の“heart”と“spirit”の使いわけについて「生物カテゴリー」のメタファーの中で詳述する。

4.2「生物カテゴリー」のメタファー

「生物カテゴリー」では、＜国家は人である＞（Deignan 2015）というメタファーが、演説内の“America's youth”という表現から見て取れる。ニクソンは人に備わる身体部位の“heart”とその同義語によって彼の主張を分かりやすく伝えており、“heart”は計 4 回、“hearts”は 1 回、そして“spirit”が 6 回使用されている。主要な分析に移る前に、“heart”と“spirit”の意味を *OED* で確認しておこう。表(12)は、*OED* の記述に基づき意味を整理した表である。

表 8. *OED* に基づく heart と spirit の比較

<heart>	<spirit>
生命の中心	人・動物に生気を与えるもの・核心
身体機能の中枢	(物質的なものと比較して)
心・精神(mind)	生命
心の奥の（深いところの）思い	身体・物質と比較して非物質的な、霊的なもの
感情の中枢	身体・物質と切り離した知性・本質
意図・意志・目的	人の霊魂・精神
愛・愛着の中枢	肉体と分離した精神
道徳・精神力の中枢	本質的に霊的なもの、非物質的なもの
献身的愛情・忠誠	本質的な特質・性質
エネルギー・精力・情熱の源	非物質的な感覚的要素
物事の中心	敵意・怒りの感情の中枢
非物質的なもの（核心・本質・最も肝要なもの）	気質・活気・生気

[表 8]から読み取れることは、“heart”は、何かの中心・中核という意味が際立っており、“spirit”は非物質性を際立たせていることである。では演説ではどのような形で生じているのだろうか。(16)は、“heart”、(17)は“spirit”のコロケーションである。

(16) a. the voices of the **heart**
b. I know the **heart** of America is good
c. I speak from my own **heart,** and the **heart** of my country
d. in our own **hearts**

(16a)は、「心の声」であるが、その声の具体的内容は、“the injured voices”(傷ついた声),“the anxious voices”(不安な声),“the voices that have despaired of being heard”(声が届くことを絶望している声)と記されている。(16a)は人々の落胆や不安を表す感情であり、*OED* の意味記述とも合致する。(16b)に関しては、アメリカの中心にあるものは善であること、つまり国を成り立たせている核の部分は根本的に善であることが述べられている。(16c)においては[表 8]の“heart”の説明に見られるように、心の深い部分のことを指し示していると考えられ、ニクソンが胸の内を打ち明けていること、そして国民が抱える気持ちを明示する表現である。(16d)が使用されているコンテクストは、人類の運命は、“in our hands” (手の中にあり)、“in our hearts”(心の中にある)というものであるが、前者は“hand”がメトニミーとして＜支配＞を表し、人類が自分たちの運命をコントロールすることが示されている。後者に関してはアメリカ国民一人一人の心のことを表していることは自明であるが、コンテクストを考慮すると、その中でも[表 8]で観察したよう意図・意志・目的の意味が含意されていることがわかる。以上のように、演説での“heart”は、心の奥の思い・感情・核の部分・意図を表している。一方、“spirit”が何を指し示すのかを明らかにするため以下の演説内でのコロケーションを確認しておきたい。

(17) a. We find ourselves rich in goods, ragged in **spirit**
b. To a crisis of **spirit**
c. We need an answer of the **spirit**
d. a great cathedral of the **spirit**
e. The way to **fulfillment** is in the use of our talents. We achieve nobility in the **spirit** that inspires that use
f. American **spirit**

ニクソンは(17a)のくたくたになっている精神の状態を、演説の中で、“empty lives” (中身の無い人生)という表現や(17b)の表現で置き換えることで精神面に焦点を当てている。(17a)ではさらに、物質面での豊かさとそれに伴うはずの精神面の欠如を浮き彫りにしている。*OED* での基本的な意味記述においても物質面との比較が際立っていたため、ここでも物質との対比で“spirit”を用いていると考えることは妥当であろう。また、“empty”の意味対立する語として演説では、(17e)のように記されている。 (17e)では、充足を得るためには国民の力が必要であり、高潔さというものはその能力の使用を駆り立てるような精神に宿ることが明記されている。つまり、ニクソンは物質性と精神性を対比させ、問題解決の糸口を精神性に求めているのである。(17f)については、「感覚カテゴリー」のメタファーとも関連するため、次節にて取り上げる。なお、演説では物質・非物質の対比を具体的に示すため、(18)のように豊かさと対立する概念である質素さも強調されている。

(18) a. When we listen to “the better angels of our nature,” we find that they celebrate **the simple things,** the basic things—such as goodness, decency, love, kindness.
b. Greateness comes in **simple trappings**. **The simple things** are the ones most needed today if we are to surmount what divides us, and cement what unites us.

(18a)では“the better angels of our nature”(われわれの本来の姿である良い天使)に耳を傾けると、天使たちは質素なもの、基本的なことを褒め称えると述べられており、質素なものとは、善、衣類、家具、住居、収入など生活に必要なもの、愛、優しさのことである。偉大さとは、質素な装飾から成立するものであり、国民を分断しているものを乗り越え、そして国民が団結するものを固めるのならそのような質素なものこそ今日では必要であることが記されている。よって、ニクソンは＜少ないことはより良いことである＞[9] (Lakoff & Johnson 1980) というメタファーを土台としていると考えられる。

4.3「感覚カテゴリー」のメタファー

感覚カテゴリーでは、ケネディ、オバマと同様に視覚に基づくメタファーが見受けられる。具体例を(19)に示す。

(19) We have endured the long **night** of American spirit. But as our **eyes** catch the **dimness** of the first **rays of dawn,** let us not curse the remaining **dark.** Let us gather the **light.**

(19)では、アメリカ国民はアメリカ精神の長い夜に耐えたことを述べた後、初めの夜明けの光線の薄暗さを目で捉えるときに、残された暗闇をののしるのではなく、光を集めようではないかと提案している。Eyes という名詞から視覚が認識され、目によって明暗を識別することが示唆されている。その際のメタファーは、＜闇は悪である＞、＜光は善である＞であるが、それと同時にアメリカの本質が見られない様子を一日[10]の中の夜で喩えていることも(19)から読み取れる。また、(17f)の全体像が(19)であるが、“American spirit”とはアメリカの本質的なもの、生気のことを指すと考えられ、その本来の姿が眠っており、その様子に耐えていたことが伺える。次の節ではまとめとして３人の大統領の使用したメタファーについて整理し、結論としたい。

---

[9] Lakoff & Johnson (1980: 22)では、通常身体経験を通して得た空間表現に基づくメタファー、MORE IS UP, GOOD IS UP から MORE IS BETTER が存在すると述べられているが、文化的・社会的価値によって、メタファーは変動し、LESS IS BETTER もメタファーの可能性としてあることが述べられている。

[10]『新英和辞典』では night の意味として、夜陰の他に夜の休息鵜・眠りという記述がある。この比喩の意味から考察すると、night は悪を指し示すだけでなく、眠りや休息の意味合いがより強く出ると思われる。

5. ケネディ、オバマ、ニクソン就任演説にみられるメタファーのまとめ

表 9. ケネディ・オバマ・ニクソンの就任演説に見られるメタファーの比較

＜起点領域＞	＜目標領域＞	＜大統領＞
＜旅＞（＜冒険＞）	＜目標までの過程＞	ケネディ・オバマ・(ニクソン)
＜競争・競技＞	＜目標までの過程＞	ケネディ
＜感覚＞	＜光は善・闇は悪＞	ケネディ・オバマ・ニクソン
＜戦争＞	＜混沌とした状態＞	オバマ
	＜目標までの過程＞	ケネディ
＜動物＞	＜専制政治の悪＞	ケネディ
＜植物＞	＜人＞	オバマ
＜人＞	＜アメリカ・他国＞	ケネディ・オバマ・ニクソン
＜少＞	＜善＞	ニクソン
＜水＞	＜好ましくない状況＞	オバマ
＜嵐＞	＜困難な状況＞	オバマ
＜季節（冬）＞	＜厳しい時・苦悩＞	オバマ
＜植物＞	＜アメリカの衰退・弱体化＞	オバマ
＜網＞	＜領域・広範囲＞	オバマ
＜衣服＞	＜意欲・モチベーション＞	オバマ
＜建物＞	＜アメリカ＞	オバマ

[表 9][11]は、第二節から第４節で観察した各大統領のメタファーの比較表である。３人に共通して認識されるメタファーは、まず「経路カテゴリー」のメタファーであり、スタート地点から目標地点を意識し、国や世界が歩まなければならない道のりを示している。「経路」に関するメタファーは大統領演説において顕著であることを、2.1 節のコーパス調査に基づき確かめた。次に共通しているのは「感覚カテゴリー」のメタファーであり、主に視覚に基づく＜光＞と＜闇＞の対立のメタファーが確認された。[表９]で示されているようにそれぞれの目標領域は、＜善＞と＜悪＞である。さらに、国を人と見立てるメタファーも共通して使用されている。なお、相違点については、「経路カテゴリー」の中のメタファーにおいてケネディ、オバマは＜旅＞を、ニクソンは＜冒険＞のメタファーを用いていたことである。ニクソンは＜冒険＞のメタファーを介入させることによって、＜旅＞＋αの要素（リスクや大胆さ）の意味合いを付け加える試みがあったと考えられる。目標達成までの過程での困難性や辛さ、好ましくない状況については、各大統領は異なるメタファーを用いて聴衆に訴えかけている。ケネディでは国家・世界の混沌とした状況を戦争状態に結び付ける＜戦争＞のメタファー、オバマは「自然カテゴリー」内で生じるメタファー(悪天候や冬の厳しさ)によって、そしてニクソンは物質と精神（豊かさと質素さ）の対立を「生物カテゴリー」内で生じる身体部位の“heart”と“spirit”によって表明している。このような相違点が見受けられる裏には、各大統領の困難性の捉え方、そしてどのようにその状況から抜けていくのかという認識が隠れていると考えられよう。

以上のように、演説におけるメタファーの分析を行うことで、各大統領が強調しているポイントをより深く読み取れる。あえて字義通りの表現を使用せず、メタファーを使用するということは、聴衆に対してのメッセージ性をより効果的に伝える目的があるのではないかと思われる。

今後は分析をより精緻化し、比較対象の人数を増やすことで、大統領のメタファー使用の共通点・相違点が生じる理由まで踏み込んで考察を深めていくことが課題である。

[11] ここではメタファーの目標領域は大枠のみしか記載していないため、詳細は各節を参照。

参考文献.

Arthur M. Schlesinger Jr (1965) *A THOUSAND DAYS John F. Kennedy in the White House*. New York: Andre Deutsch.

Clark, Thurston (2004) *ASK NOT: The Inauguration of John F. Kennedy and the Speech that Changed America*. New York: Penguin Books. (土田宏訳『ケネディ 時代を変えた就任演説』彩流社, 2006年)

Charteris-Black Jonathan (2011) *Politician and Rhetoric*. New York: Palgrave Macmillan.

Deignan, Alice (2015) *Metaphor and Corpus Linguistics.* Amsterdam: John Benjamins.

Grady,J.,T. Oakley, and S. Coulson (1999) "Blending and metaphor." In G. Steen and R.Gibbs (eds.) *Metaphor in cognitive linguistics,* (pp.101-124). Amsterdam: John Benjamins.

Goossens, Louis (1995) "Metaphtonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions of linguistics action". In L. Goossens, P. Pauwels, B. Rudzka-Ostyn, A. Simon-Vanderbergen, & J. Vanparys (Eds.), *By word of mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective* (pp. 159-174). Amsterdam: John Benjamins.

Johnson, Mark (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason.* Chicago and London. The University of Chicago Press.

Lakoff, George and M, Johnson (1980) *Metaphors we live by.* Chicago: University Of Chicago Press.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George and M, Turner (1989) *More than cool reason: A Field Guide to Poetic Metaphor.* Chicago and London. University of Chicago Press.

Lakoff, George (2002) *Moral Politics: How Liberals and Conservatives Think.* Chicago and London: University of Chicago Press.

Semino, Elena (2008) *Metaphor in discourse.* Cambridge: Cambridge University Press.

Sorensen, Theodore C (1965) *Kennedy.* New York: Harper & Row.

佐藤信夫 (1992)『レトリック認識』講談社.

佐藤信夫 (2006)『レトリック事典』大修館.

鈴木建 (2010)『政治レトリックとアメリカ文化. オバマに学ぶ説得コミュニケーション』朝日出版社.

（コーパス）

Corpus of Political Speeches. (http://www.presidency.ucsb.edu/ws/index.php?pid=14379)

（辞書）

『リーダース英和辞典』(2012) 株式会社研究社.

『新英和辞典』(2013) 株式会社研究社.

『オックスフォード新英英辞典』(2005) Oxford University Press.

Oxford English Dictionary. (http://www.oed.com.remote.library.osaka-u.ac.jp/)